

丹羽文雄

山肌

下卷

山
肌

下
卷

丹
羽
文
雄

新潮社

© Fumio Niwa 1980, Printed in Japan

山 肌 下巻(全三巻)

昭和五十五年六月二十日発行
昭和五十五年八月十五日三刷

著 者 丹 羽 文 雄

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町七十一

電話 業務部(03)三六―五二二

編集部(03)三六―五四二

振替 東京四―八〇八

印刷 二光印刷株式会社

製本 大口製本株式会社

定価 九五〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目 次

明暗	198	涙する場所	177	閑日	154	同僚の間	138	不潔	109	祖母という衝撃	74	辞任	60	同棲	7
----	-----	-------	-----	----	-----	------	-----	----	-----	---------	----	----	----	----	---

装画・題字

牛島憲之

山

肌

下
卷

同

棲

辰也はひとりで、銀座の表通りを歩いていた。銀座八丁を、ゆっくり往復した。人間があふれていると思った。どの顔も日本人であることが、ちょっと異様であった。たまには外人も歩いているのだろうが、見あたらなかった。それは偶然であつたろう。辰也は、自分がエトランゼであるのを感じた。日本人であることを忘れているようであった。それは、日ごろの感覚の錯覚であつた。パリの繁華街を歩いているときには、自分が日本人であるという意識はなかった。人間というものは、よくよく環境に順応するように出てくると、ふと、そんなことばが頭をかすめた。

日本にたまにかえつて来るが、街の顔は来るたびに変わっていた。根こそぎに変わっているところもあった。二、三ヶ月も銀座を歩かないでいると、銀座の街が変わっていると聞

いた。パリやロンドンでは、内部はいくら変えても差支えないが、表向きは絶対に昔のままの姿を崩すなど法律にあると、辰也は聞いたことがあった。辰也は昔の銀座の記憶をたどりながら歩いていたが、なじみの店は半分以上なくなっていた。学生のころ、銀座の飲食店を一軒のこらずのぞいてみようと思つたことがあった。喫茶店、中華料理店、大衆食堂、高級レストラン、そば屋、鮎屋、おでん屋と、軒なみに客となつた。が、一丁目から四丁目まで、一年ちかくかかった。銀座は軒なみに飲食店であるといつてもよかつた。その努力のむなしさに、辰也はやりきれなくなつた。このことは、姉には報告しなかつた。

歩きつかれた辰也は、ホテルのロビーにはいった。間もなくあらわれたのが、愛子であつた。

「兄さん、まだ？」

「おじさんも、いま来たところだ」

さすがにホテルでは、外人客が多かつた。辰也は、日本人ばかりの銀座を歩いていて疲れたが、外人の顔をみて、ほっとしている自分に気がついた。

——日本は遠くなりけりか。

自分が日本人である意識が次第に稀薄になっていき、ふだんでもまるでそのことを感じなくなつたところから、自分の絵がすこしずつ変わってきたことを辰也は感じていた。そ

こにどのような心理の変化があったのか、深く考えたこともなかったが、絵の上に微妙な変化があらわれたのは事実であった。

「主任さんに話したのよ、私が芸大を受験することであることを」

愛子が話し出した。

「あそこをやめるということか」

「それは困るといわれたわ」

「愛子はそれほど優秀な社員だからだろう」

「私の描くものは、立派に商品になるからよ。つまり役に立つ社員ね。たとい芸大に入学しても、うちの縁は切らないでほしいって。週に一、二回出社してほしいといわれたけど、それじゃ私が中途半端になってしまうでしょう」

「アルバイトのつもりなら、いいだろう。学生がアルバイトするのは、いまでは常識だ」

穀があらわれた。そこに妹がいるので、おやという顔をした。

「ちようどいいや、愛子といっしょに食事するのは、珍しいよ」

ひさしぶりに顔を合わせた辰也に対して、ろくろく挨拶もせず、穀が食堂のほうにいった。が、間もなく戻ってきた。

「何年ぶりかしら。おじさんはちっとも変わってないね」

「この年齢で、変りようがないじゃないか。それよりも穀は、さすがに社会人らしくなったね」

それでひさしぶりの挨拶がすんだ。

辰也の目には、穀が年齢のわりに老けているように映った。青年らしい若々しさがなかった。

「おじさんに、うちの会社に来てもらったのよ」

「ああ、そうか」といい、「ママは？」

「相変わらずよ。歩きまわってるから、かかとがすっかり堅くなってるわ。ママ、お風呂で、気にしてたわ。熱心に軽石でかかとをこすってたわ」

「ママの足は、ちっとも崩れてないよ。あの年齢になると、体重プラス年月で、形が崩れて、醜悪なものになってしまうものだが、不思議とママの足全体がきれいだよ」

「男のくせに、へんなどころに注目してるのね」

「昔からママは、足を大切にするひとだった。ママの足をこうして」

両手をひろげて、その上に苑子の足をのせるような恰好になった。

「いまでも女の足として、見るにたえる形をたもっているよ。足指の一本々々にも、神経がゆききどいてる」

「私なんか、足はからだの付属品のつもりで、いいかげん

に扱ってんだけど、ママはちがうのね」

ボーイが、食堂の支度が出来たといいいに来た。

中庭よりのテーブルに、三人がついた。ブドウ酒が出た。

「個展の準備はもう出来たの？」

「どうせ船便はおくれるだろうと思って、早く送り出してよかったよ。予定より一週間おくれて、横浜につくらしい。

赤壁画廊から、通知があったところだ」

「画家って、いい職業だ。年齢をとるほどいい仕事が出来るなんて、そんなのはほかにないよ」

「殺は、テレビの営業部だって？」

「近く編成局に替わるかも知れない」

「成績が悪かったから？」

愛子が訊いた。

「バカいえ、抜擢だ」

談笑のあいだにも、辰也は殺が年齢以上に老けてみえることが気になった。気のせいかな、うつすら眼の下にくまが出来ている。いくら異性との生活がはげしいからといって、殺の年齢で眼の下にくまが出来るはずはなかった。二つ年上の女であることを辰也はあらためて思った。

愛子は辰也に負けず健啖であったが、殺は少食であった。ほとんどの皿に、半分以上を残した。

「どうしたんだ、いまからそんな少食では、からだがつづ

かないぞ。のむんだろう？」

殺は、あいまいにうなずいた。

「兄さん、近ごろ瘦せて来たわ」

「健康診断をうけているのか」

「どこかといって悪いところはない。レントゲンでしらべてもらったが、胃潰瘍の痕跡があるといわれたよ」

殺が、ひとごとのようにいった。

「胃潰瘍の痕跡といえば、一時はそれで病んでいたのだから」

「食欲が減退したけど、べつに医者で診てもらわなかった。診てもらうのは億劫だから」

「その状態を、ママは知ってるのか」

「このごろママに会っていない」

「兄さんがしょつ中お酒をのんでいることは、ママは知ってるわ。仕事の性質上、仕方がないことだといってたわ」

営業部で働いていると、客とのつき合いが仕事の大部分であり、当然のむ機会も多かった。苑子には、殺の職業の性質が判っていた。スポンサーの獲得といえば、保険の外務員が客をとらえると同じことであった。殺は学生のところから、ときどきのんでいたが、それは面白半分の酒であったが、営業部にはいつてから、めきめきと酒の腕をあげた。三沢家には贈物の洋酒がいつもあったが、苑子が気がつい

たときには、殺にみんなのまれていた。

「みんながいっしょのとき、ちびちびとのんでいるという程度なら、心配はないけれど、嫌をかかえて、自分の部屋にこもるようになれば、危険信号ですよ。殺の年齢にしては、すこし早すぎるようね」

と、苑子がいったことがあった。が、アパートに移ってからは、苑子の目が届かなくなつた。

「営業部から編成局にうつるのは、健康のためにもよいのではないか」

「低くのからだを心配して、編成局にうつしてくれるのかも知れないよ。しかし、そんな親切な上役は、ちよつと見あたらないがね」

愛子と殺の位置は、窓を向いていた。客の出入りは、背後で行われた。

食事中、辰也がおやというふうに二人の背後に目を送つた。だれかを発見したふうであつた。それに誘われて、愛子がふりかへつた。中年の大柄の女性が、中年の男客と食堂を出ていくところが眺められた。

——ママだ。

殺も、ちよつとふりかへつた。が、殺には何も発見されなかつた。

「ママでしよう?」

愛子が辰也にたしかめた。

「うん、たしか姉さんのようだった」

「外務員だもの、お客さんとかういうところに出入りするもの、職業の内よ」

「そうだろうね。きれいな中年女性には、あまりお目にかからないが、おやというほどの発見だったよ。それが姉だとは、とんだお笑いぐさだ」

殺があらためてふりかへつたが、そこらあたりには苑子のすがたはなかつた。

「こんなところに来るのかしら」

「ママは支部長さんよ。こうした派手な舞台も、ママにとっては職場の内でしょう」

「どんな相手だった?」

殺が訊いた。

「どこか大きな会社の管理職ってタイプだったわね」

「ママはこちらに気がつかなかったのだね」

「気がついたら、そのままかえっていくママじゃないわ」

「そうだね」

それだけで苑子ことは、話題から消えた。そのころ、苑子はホテルの地下の売店に下りていた。つれの中年男は、いなくなつていた。

立野雄作は一足先に、ホテルの玄関から車にのつた。

どれだけか経って、苑子がホテルのおなじところから車にのったが、だれもふたりが食堂でいっしょにいたとは知らないようであった。

苑子は、ホテル・セーゾンで車を下りた。

フロントの前を通るとき、ちょっと立ちどまった。

「いつもの部屋？」

「はう」

ことばにはならず、合図が交されたようであった。それで、通じ合った。苑子は泊り客のようにエレベーターにのった。ボーイたちは泊り客のように苑子を見送った。いつもの部屋の前に来ると、苑子はノックをせずノブをひねった。

その時間には、ホテルを出た三人が、銀座に向けて歩いていて、並木のある通りを歩いているとき、

「この路地の奥のバアに、二、三回来たことがあるわ。アニメの連中といっしょだったけど、そのカウンスターに義武兄さんが女のひとといっしょに来てるのをみて、びっくりしちゃった」

「兄貴が女のひとと？」

殺には、思いもよらなかった。

「声をかけては悪いと思って、知らんふりをしたわ。兄さんのほうでも、私に気がつかなかったわ。義武兄さんは文

字通りの堅物と思ってたけど、やはり一般なみの男だったのね」

「どんな女のひと？」

「素人っぽいけど、純粹の素人ではなかったようね。そんなに若くもないひとだったわ。ホステスらしくもなかった。といって、どこかの細君という感じでもなかったし、見当がつかなかったわ」

「義武が細君以外の女性と酒場に来てたのか。義武だから、ニュースになるんだね」

辰也が笑った。

「あの兄貴に、そんな一面があったのか」

吐きすてるように殺がいった。

結婚を反対されて、殺は兄はそういう人間だと軽蔑していた。ひとに対しては偏見だけでわり切ってしまう。兄の二重人格を思った。

角が鮎屋になっている路地をはいると、三、四軒の酒場があった。その左手の最初のバアが「鈴鹿」であった。殺が、先にはいった。辰也がはいると、悠々たる態度で、店内を見まわした。テーブルが五つ六つ、カウンスターが正面についていた。中年のバーテンがひとり、女の子が五、六人いた。これといって特色のある酒場とも思えなかった。時間のせいか、客は二、三人であった。辰也は問題の女性

をさがしたが、それらしい女性が見あたらなかった。壁に油絵があったが、とくに辰也の目をとらえる絵もなかった。ホステスのひとりが、緞の注文はのみこんでいるように、「いつものものですね」といふ、愛子と辰也から注文をとった。

「しよっ中來てるのか」

「いや」

「アパートはどこだ」

「新富町」

「なつかしい名前だ。まだその町名が残っていたのか」

「川はなくなっているよ」

辰也の昔の記憶も、あいまいであった。川がなくなったという現実感が、器用にとらえられなかった。

「そのアパートで同棲と聞いているが」

「室は別々だ」

「日本のアパートは、みんな部屋が小さいね。向うの家は一つ大きいのがあって、そのまわりに小部屋がついているという工合だ」

カウンターのぐぐり戸から、問題の女性があらわれた。

その和服の女を見て、辰也にはすぐ判った。他の女と年齢は大してちがわないが、さすがにマダムらしい貫禄を感じさせた。まっすぐ辰也らの席に來た。

「いらっしゃいませ」

「マダムの祐子」

緞が紹介した。が、それきり緞がだまつたので、愛子がひきとった。

「こちらは私たちのたつたひとりの叔父さんです。フランズ人になりたがっている洋画家の司辰也」

「お話はかねてから聞いてました」

祐子が、辰也の正面の小さい椅子にかけた。姉のもつ雰囲気、辰也は思い出した。苑子ほどの身長はないが、何となく顔の造作が似ていた。しかし、姉のような口許ではなかった。

——姉に似ている！

辰也は、緞を見た。緞は目を伏せていた。心の秘密を叔父に見ぬかれたので、てれているようであった。

——母さんっ子の殺らしい選択か。

マダム祐子は、いわゆる酒場のマダムらしい風貌ではなかった。女の顔は化粧によって、いくらか変化するものであるが、祐子のはふつうの女の顔をしていた。化粧もあつさりとしていた。つけまつ毛でもなく、眉も描いていなかった。唇の紅もめだたなかった。

——姉の小型のようではないか。

愛子がしきりとマダムの祐子と話を交わしていた。気が

合うというのだろうか、ふたりの話ぶりにはマダムと客という感じがなくて、古くからの友達のようにであった。穀がときどき、口をはさんだ。ほかのホステスは、敬遠するようによりつかなかった。辰也はカップを舐めるようなみ方をしていたが、祐子と穀をながめていると、穀の気持が、何となく合点がいくような気がした。祐子には、酒場のマダムになりきれない、どこか素人っぽいところがあった。

辰也は、友達のことばを思い出していた。

「男も細君に似た女が好きになっている内は、浮気にしても、まだ純情ということが出来る。が、細君と反対の女性つまり風貌や性格がまったく細君とちがっている女が好きになりだしたなら、それはもう本物の浮気ということになる」

友達は今合の例をあげて、説明した。おなじ画家のある男が、ほかの女性と交渉をもつようになった。おきまりの家庭騒動になったが、その女が顔つきから、からだつきまで細君とそっくりであった。辰也はそれを知ったとき、不思議な気がした。細君に倦きた男が、ほかの女に興味をもつ、それが浮気というものだと考えていたが、その場合は、細君に反抗するためには、まったくちがった女性でなければならなかった。が、その知合は、細君に似た女性にこそをひかれた。辰也は、浮気というものに自分が偏見をも

っていたのに気がついた。その知合が第三の女性を好きになったのは、細君がいやになったからではなかった。細君に似た女であるために、かえってそこをひかれるようになった。細君に飽いたのではなかった。

——純情な浮気か。

浮気の相手が、細君とまったく別な女性の場合がある。そしてこの例の方が多かった。それこそ本物の浮気であった。細君に得られないものを、男はほかの女に求めたがるものだという。その場限りの浮気もあれば、永続する浮気もあるという。そういう経験にとぼしい辰也は、祐子と穀の場合は、純情の方であろうかと、距離をおいて、二人を眺めやう。

——穀には、細君はない。するとかれの場合は、浮気ともいわれないが、祐子がどことなく姉に似ているのは、どうしたわけか。

穀がマザーコンプレックスであったことは、辰也は知っていた。穀は自分でも気がつかないで、第三者の女性に母の面影を求めているのであろうか。そう思うと、祐子がますます姉に似てくるような気がした。

——姉はこのことを知っているのか。

三沢圭介や義武が、結婚に反対しているのは、くだらない理由だと、辰也は穀のために、一ト肌脱いでもよいと思

った。

「それよりも辰也君、君自身の結婚を考えたらどうか」

辰也には、圭介のことばが想像された。

祐子は毅然に、自分の過去を話していた。生れは四日市であつた。母と弟があつた。いまでは弟も結婚している。祐子は高校を卒業して、会社につとめていたころ、恋愛をした。相手は京都の大学に在学中であつた。結婚の話は出なかつたが、男の方がまだ三年も大学が残つていたせいもあつた。大学を卒業したならば、当然結婚話がおこるはずであつた。男は若いくせに、女のあつかいが上手であつた。それを祐子は、愛情と解していた。だんだんと男のことが判つてきた。男は高校生のころから女出入があり、現在も二、三人とつきあつてゐるということが判ると、祐子は決然と男と別れた。男を捨てた形になつた。友達を訪ねて東京に出て、銀座の一流の酒場にはいつた。祐子はあやまりをくりかえすまいと、自分に誓つた。マダムにはそのような祐子の生き方が判るらしく、信用された。いっしょに働いていた親しい朋輩が、小さい酒場をもつた。祐子は、それに刺戟された。いいよる客の中から、三十歳も年上の会社社長を祐子は選んだ。独立した友達のまねであつた。が、株式会社の社長には、まとまつた金を融通することが出来なかつた。祐子の失敗であつたが、かえつてそのことがよ

かつた。半分は社長が金を出してくれたが、あとの金は保証人となつて、銀行から借りることが出来た。祐子は、銀座裏に小さい酒場をもつた。もとのマダムも、応援をしてくれた。ホステスらしくない持ち味が、客に人気があつた。三年も経つと、祐子は銀行の借金をかえした。

「保証人はいりません。いくらでもお貸ししますから、うちを使つて下さい」

と、銀行マンに信用された。

バトロンの社長は、心臓の持病があつた。長い入院生活がつづいてゐる内に、いつか關係が切れたも同然となつた。四日市の母親が上京して、滞在していくようになった。

「結婚することを考えなさい。いつまでもこんな生活をしてゐるものではない。女の花は、いのちが短いものだから」

「三十がすぎたら、考えるわ」

「三十はおそすぎます」

店には、ときどき先のマダムが、客をつれて来てくれた。その客が、祐子の店の客となつた。

縁が偶然、スポンサーをつれて、店に來た。席に案内して、縁の正面に祐子が腰を下したとき、

「君が、このマダム？」

「若すぎて、賈禄不足でしょう」